

10年のあゆみ

10 Years of Service
KANAGAWA INTERNATIONAL ASSOCIATION

1977 

1978 

1979 

1980 

1981 

1982 

1983 

1984 

1985 

1986 



目 次

- 1—ごあいさつ
- 2—(財)神奈川県国際交流協会の沿革
- 4/5—はじめに
- 各事業記録
- 6/7—展 示
- 8-11—講演会・座談会
- 12/13—公演・映画会
- 14/15—日本語スピーチ大会「外国人、大いに語る」
- 16/17—人の交流
- 18/19—民際交流援助金
- 20/21—情報と資料の提供・収集
- 22—語学講座
- 23—刊行物
- 24—その他
- 25—新聞記事から

ごあいさつ

(財)神奈川県国際交流協会
会長 長洲 一二

(財)神奈川県国際交流協会の事業につきましては、いつも暖かい御理解と御支援を賜り、深く感謝しております。

私は、知事に就任しましてから、平和こそが子や孫に誇れる最大の遺産ではないかと常々話してまいりました。しかし、現実の世界は、東西関係、核問題、南北問題、人権問題など深刻な国際的課題が山積しています。これらの問題の解決には、国家レベルの活動に負うところが大きいとはいえ、国境を越えた市民同士、自治体同士の多様な交流を通じて相互の結びつきを強め、世界のすべての人々が共に人間らしく生きていける平和な世界の創造をめざしてゆくことが求められています。

私は、このことから市民レベルを主役とした「民際外交」を提唱し、神奈川県政の重要な柱として位置づけてまいりました。

一方、市民レベルにおける交流活動を促進するための民間団体として、昭和52年に財団法人・神奈川県国際交流協会が設立され、今年で10年になろうとしています。

交流協会は「人と文化の交流」をキャッチフレーズとして、設立当初はそれこそ手探りで事業や活動に取り組んでまいりましたが、それが徐々に広く知られるようになり、同時に、内外の関係者から強い関心がよせられ、評価もいただけてまいりました。私どもにとっては、誠にありがたいことでもあります。

それにもまして、これまで協会の財政を支えていただいた神奈川県をはじめ、県内各市町村、多くの民間企業など、また、事業展開に多大な御協力をいただいた外務省、各国大使館、関係文化団体および県内外の国際交流団体の方々に心から感謝申し上げます。

私が切に願うことは、この神奈川を世界の人々との多様な交流を通じて、人間としての共感を確めあう、そんな社会と風土にできないだろうかということです。そんなつもりで、私は、民際外交の新たな展開を図りたいと思っています。そして、このような民際交流の実践を通して、ゆるぎない「平和な社会」の創造を目指してまいりたいと考えています。

創立10周年を機に、民際交流活動の拠点として、協会は市民団体との連携、それらの活動支援、団体間の協力や情報交換などを一層強化して、交流の輪を広げ、草の根の市民グループにも親しまれる、より身近な存在にしていきたいと思っています。

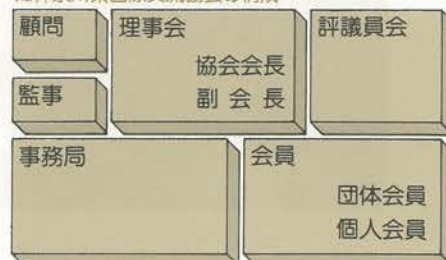
どうぞ皆様方の御支援と御協力をお願い申し上げます。



(財)神奈川県国際交流協会の沿革

- 1976年(昭和51年) 12月 ■ 設立総会を開催
- 1977年(昭和52年) 2月 ■ 財団として正式発足
 6月 ■ 事務局を所在地(横浜市中区山下町2・産貿センター9階)に移す
 7月 ■ 神奈川県国際交流センター開設
 9月 ■ 英会話講座を開始
 10月 ■ 「イラン・ウィーク」開催(展示、講演、映画上映の初め)
 ■ 外国人のための日本語講座を開始
- 1978年(昭和53年) 1月 ■ オーストラリア留学生への日本語講座開講(特別日本語講座の初め)
 6月 ■ ホーム・ステイ受入家庭の募集を開始
 7月 ■ 神奈川県招聘海外技術研修生への特別日本語講座を開始
 11月 ■ 海外資料室を開館
- 1979年(昭和54年) 5月 ■ ルーマニア民族音楽演奏会(音楽会の初め)
- 1980年(昭和55年) 4月 ■ パキスタン国立民族舞蹈団公演(公演事業の初め)
 7月 ■ インドシナ難民児童救援募金
 ■ 基本財産の増額に着手
 12月 ■ 「世界の絵本展—ヨコハマ」第1回開催
- 1981年(昭和56年) 2月 ■ スウェーデン・エーテボリ市へ図書送付(海外との図書交換の初め)
 3月 ■ アメリカ・メリーランド州へ神奈川新聞記者を派遣(海外への人物派遣の初め)
 4月 ■ 英語によるシリーズ講演会「Talking across Gaps」を開始
- 1982年(昭和57年) 1月 ■ 「G・ブレイン打楽器教室」を秦野、平塚で開催(横浜以外での事業展開の初め)
 4月 ■ 機関紙「ハロー・フレンズ」の発行部数を5000部に拡大
 5月 ■ 「民際交流援助金」を創設
 9月 ■ 英語版機関紙「Hello Friends International Issue」を創刊
- 1983年(昭和58年) 3月 ■ 基本財産3億円を達成
 6月 ■ 日本語セミナー「新聞を読んでもみませんか」を開始
 9月 ■ アメリカ・メリーランド州からの英語講師招聘を開始
- 1984年(昭和59年) 1月 ■ 通訳・翻訳者リスト「ヘルピング・ハンド」を刊行
 3月 ■ 国際交流団体リスト「便利帳」を刊行
 4月 ■ 「民際交流援助金」を国内プロジェクトにも拡大
 11月 ■ 外国人のための神奈川ガイド・ブック「Enjoying Kanagawa」を刊行
- 1985年(昭和60年) 3月 ■ 日本語スピーチ大会「外国人、大いに語る」第1回開催
- 1986年(昭和61年) 3月 ■ ニュージーランドへ「お台所交流訪問団」を派遣(初の海外派遣団)
 4月 ■ 海外資料室の館外貸し出しを開始
 5月 ■ ホーム・ステイ受入家庭の登録数が100を突破
 8月 ■ 「留学生・研修生受入協力家庭」が発足

財)神奈川県国際交流協会の構成





10年のあゆみ



はじめに

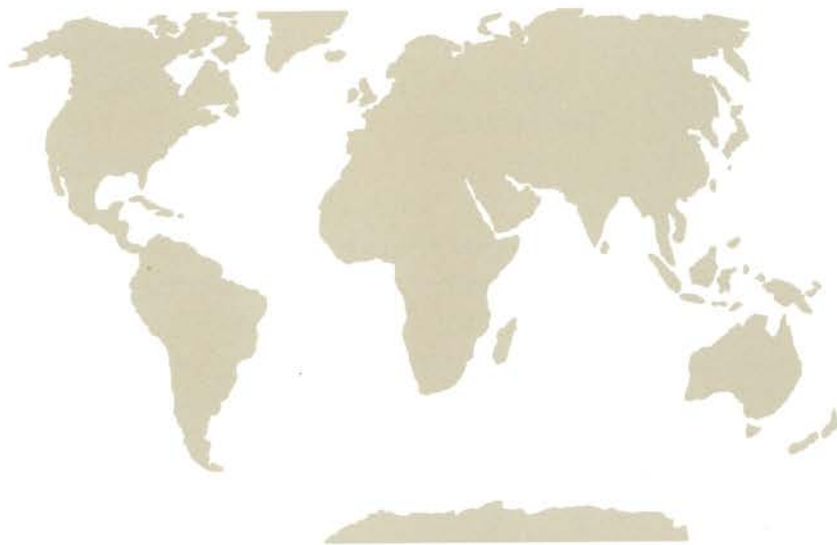
1977年(昭和52年)、長洲神奈川県知事によって投げられた「民際外交」のテーゼは、おりからの石油危機という世界的な経済情勢や、それにつれて変動する国際政局の中で、あらためて日本と世界のつながりを見直すひとつのきっかけになりました。「国際」に対しての「民際」——政治を超えて市民同士が親善交流を深め、他国の文化・社会を理解し合い、ひいては少しでも世界の平和に貢献することをねらいとし、その主役は私たちひとりひとりである——この理念は、従来の国際交流とは一味違う新しい考え方として、内外の共感を呼びました。そして、その理念を実践する団体として(財)神奈川県国際交流協会が産声をあげたのです。

ところが、いざスタートしてみると、すべてが順調に進むとは限りませんでした。限られた数の職員と財源、しかもまだ協会の知名度は低く、設立趣旨や事業理念がなかなか先方に伝わらないこともありました。このため開設当初の作業は、もっぱら協会の「宣伝」に力が注がれました。職員は休日返上で作った説明書を手在りの各国大使館や文化団体などを訪れ、事業への理解と参加を求めました。また、海外のマス・メディアを通して協会の紹介を行なうなど、可能なことはすべて試みることにしました。さいわいその反応はよく、次第に多くの方が関心を示してくれるようになりました。協会の設立趣旨に注目した

海外のいくつかの報道機関は“People to People Diplomacy”を見出しとする記事を掲載し、その結果、中近東や東南アジア、ポルトガルなどの青年男女から、同世代の日本人との文通を望む手紙が多数寄せられるようにもなりました。

協会ではこうした希望を早速、機関紙「ハロー・フレンズ」で紹介し、日本側の反応を待ちましたが、そのさいにひとつ気掛りなことに出くわしました。それは、北欧やポルトガルとの文通を希望する日本人男女は多いのに、そのほかの国々を希望する人が極端に少なかったことです。この原因はなにか、なぜか——これが協会の仕事を進めていく上での最初の疑問となりました。と同時に、民際交流を実現してゆく過程には一朝一夕で解決できない根深い問題も存在していることを知らされました。以来今日まで、個々の事業に取り組むにあたっては、なにが本当の「民際」か、どうしたら「民際」にふさわしいかをつねに考え、それを協会事業に参加される市民のかたがたに提示してきたつもりです。

財団としての協会の財源は当初わずかに700万円。それ以外は神奈川県からの補助金に負うところが多かったわけですが、当然のことながら、開設時の各事業の展開は「手作り事業」が基礎となりました。たとえば、展示、講演、映画、公演といったものを組み合わせ、海外各国の社会風土、歴史、文化について



FOREWORD

In Kanagawa, the concept of “people to people” diplomacy was launched by Governor Kazuji Nagasu, who saw its potential for creating a new world order based on the awareness of global interdependence — an imperative for world peace.

KIA was founded in 1977 as a key organization to communicate his belief that every single citizen is a “critical factor” in the development of meaningful international exchange. This new foundation started with a fund of seven million Yen and a subsidy from the Prefectural Government. The first task was to proceed with a public awareness program at home and abroad, through

personal visits and media publicity. These efforts were highly successful, and we were encouraged when letters requesting Japanese pen-pals began to arrive in bulk from various countries.

Charting its course through unexplored territory, the KIA staff found itself involved in many diverse tasks, from obtaining materials on lesser known and not easily accessible countries, to nailing display panels to the wall. Within a limited budget, the first series of presentations of foreign cultures was initiated. Through these fledgling efforts, additional expertise and insight were achieved, and many imaginative programs were created.

ての紹介事業を数多く開催しましたが、会場の設営はもちろん、展示パネルの工作や釘打ちに至るまで、すべて職員みずからの手で行ないました。また、大きな国より小さな国を、よく知られている国より知られていない国を、そして、近くても「遠い」国を、という考えに立って、それらの国々の紹介に努めて来ました。それだけに、事業の開催にあたっては、展示物などの「素材」の入手に大変苦労しました。直接海外から送られて来る展示物が会期直前になっても到着せず、ハラハラさせられることもありました。しかし、こうした「混乱」の中から、かえってさまざまな経験を積むことができましたし、その際の各関係機関の方々との率直な意見交換を通して、互いに信頼を培うことができました。それは以後の事業展開にも大きな助けになりました。

その後、海外資料室の開館、ホーム・ステイ制度の開始といった経過を経て、1980年(昭和55年)からは基本財産の増額に取り組みました。このころには「インドシナ難民児童救援募金」、海外への記者派遣など、単発のプログラムも取り入れ、1982年(昭和57年)以降は横浜以外での事業展開も図るようになりました。同時に市民が自主的に企画・立案したさまざまな交流プロジェクトに資金援助をする「民際交流援助金」のプログラムを創設、これまで協会だけでは果たし得なかった民際の輪を拡大

し、文字どおり市民を主役にした民際外交の展開に幅広く道を開きました。翌1983年(昭和58年)、基本財産3億円をほぼ実現した段階では、神奈川の友好州アメリカ・メリーランド州からの英語講師招聘を開始、1984年(昭和59年)には「ヘルピング・ハンド」ほか2冊の刊行物を発行するなど、その時々協会の力で実現可能なことは積極的にこれを試みてきました。その際には、少なくとも一過性の派手さだけをねらった「祭事」に終わらせまいと常に心がけたつもりです。

こうして協会の仕事はようやく軌道に乗り、念願であった協会の自主性も高まって来ましたが、民際交流を文字通り着実に育てるための決定的な方法や即効的な「妙薬」を発見したわけではありません。また、協会では設立以来、協会が民際交流をただ一方的に与えるのではなく、市民のみなさんにも共通の基盤に立って共に参加していただき、みずからの当事者意識を培っていただきたいとの願いをもって来ました。そのための機会と素材を提供してきたのがこの10年間だったと言えるかもしれません。これからまた10年、協会そのものの努力は当然ですが、実り多い民際外交発展のため、さらに幅広いみなさんのご理解とご協力をお願い致します。

なお、この小冊子には、設立から1987年(昭和62年)3月末までに協会が実施したすべての主催事業がまとめてあります。



Despite the prejudice and negative attitudes that were often encountered, the Association reached out in countless ways to diminish the myths and misunderstandings that keep the world bound by bias and artificial boundaries.

The ten years from the inauguration have seen considerable developments in KIA's programs, including the management of an international library, home stays, refugee children relief campaigns, exchange of people across the Pacific, and publication of newsletters and booklets. Among other activities, the Exchange Grant program has proved of particular benefit to citizens who

wish to carry out their own original projects, at a level unencumbered by protocol.

Since its inception, the Association's fund has expanded to three hundred million Yen, and its philosophy and operational patterns have taken shape. KIA has always intended to provide citizens with a common ground of shared interests and opportunities to contribute their time and talents for the creation of long lasting friendships with their neighbors around the world.

We would like to ask for every individual's support and participation in our efforts to cope with the challenges of the future.

展 示

EXHIBITIONS



NZマオリ写真展(1980)

At a very early stage, KIA started exhibitions as a part of its 'Overseas Cultural Week', which portrayed a featured country through lectures, film shows, distribution of literature, and displays of art and handicrafts. Increased collaboration with foreign institutions and other related organizations enabled us to expand this program over time.

In addition to these cultural presentations, KIA annually sponsors the popular exhibition of "World Picture Books". We also assist other organizations and local exhibition halls, by supplying display materials for cultural events.

We are particularly pleased when we can help introduce the common aspects of daily life in other nations, especially in the case of lesser known countries.

展示は協会の最も古典的な事業ですが、はじめは講演や映画と組み合わせ「……ウィーク」と銘打った総合的な催しの一部でした。予算が限られ、協会の知名度も低い中でひとり立ちするに足る素材がなかなか入手できなかったことも、その理由のひとつでした。しかし、その後、海外各国出先機関や国際交流団体との継続的な接触を通じて、徐々にそうした悩みが解消され、最近では県内各地域へ展示素材をあっせんするまでになりました。1980年から始めた「世界の絵本展—ヨコハマ」は毎年末の恒例行事に育ち、年齢を問わず楽しめる展示事業として広く親しまれています。

展示事業の企画にあたっては、日頃ふんだんに情報の得られる大国より、あまり我々が接する機会のない小さな国の素材を積極的に取り上げてゆく立場をとってきました。また、いたずらにその国の違いだけにスポットを当てず、我々と共通した日常生活のさまざまな側面を紹介するように努めています。

なお、展示物の一部は協会に保存し、一般の要望に応じて貸し出しも行なっています。

1977年(昭和52年) ■イラン・ウィーク(写真・民芸品展、10.1~10.7) ■海外に生きる日本人(写真・民芸品展 11.3~11.27) ■国連とわたしたち(写真・パネル展、12.6~12.18)

1978年(昭和53年) ■ポーランド・ウィーク(紙工芸品展、2.21~2.26) ■オーストラリア・ウィーク(写真・書籍展、5.27~6.10) ■スウェーデン・ウィーク(織物・民芸品展、8.26~9.10) ■ポーランド・フェスティバル(工芸品展、11.10~11.19) ■ルーマニア展(写真展、11.25~11.30) ■DDR<ドイツ民主共和国>のクリスマス(工芸品展、12.16~12.24)

1979年(昭和54年) ■新・移住展—移住これから(パネル展、2.20~2.28) ■カナダ・ウィーク(写真・版画展、3.24~4.1) ■デンマーク・ウィーク(装飾工芸展、4.14~4.21) ■ルーマニア・ウィーク(絵画・写真展、5.12~5.20) ■南米の移住者は、いま……(写真展、6.19~6.24) ■ホセ・アルフォンソ・クニ絵画展(7.12~7.22) ■DDRウィーク(写真・絵画展、10.27~11.3) ■ペルー・ウィーク(写真展、11.17~11.23)

1980年(昭和55年) ■アフリカ・ウィーク(パネル・彫刻展、2.26~3.16) ■ハンガリー写真展(5.10~5.25) ■オーストラリア・ウィーク(絵画展、6.21~7.6) ■チュニジア・ウィーク(民芸品展、7.12~7.27) ■ニュージーランド・マオリ写真展(8.9~8.17) ■アルゼンチン・サンタンデル版画展(10.24~11.3) ■ルーマニア・ダキア王国の遺跡写真展(11.20~11.30) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第1回、12.20~12.27)

1981年(昭和56年) ■ネパール・人と風土(写真展、3.7~3.20) ■現代のハンガリー展(写真展、4.4~4.12) ■デンマーク春の写真ポスター展(4.18~4.28) ■変わりゆくアラブ(写真展、5.23~6.7) ■ギリシャ・パルテノン展(写真展、9.26~10.9) ■キューバ・ワン・モア・ヴュー(ポスター・民芸品展、12.5~12.13) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第2回、テーマ:絵本のできるまで、12.19~12.26)

1982年(昭和57年) ■現代カナダとその横顔(写真展、1.23~1.30) ■ハンガリーの自然(写真展、3.6~3.14) ■オーバ・ブラジル写真展(6.19~6.26) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第3回、テーマ:珍しい絵本、12.21~12.26)

1983年(昭和58年) ■吉田ルイ子のニューヨーク黙視録(写真展、4.9~4.17) ■シンガポール書画美術展(6.14~6.19) ■スウェーデン環境保護写真展(6.17~6.22=神奈川県立自然保護センター、6.24~6.29=神奈川県政総合センター) ■パシフィック・ムーンズ—ロンダ・グリーグの描く太平洋の月(絵画展、8.30~9.4=神奈川県民ギャラリー) ■小さな万華鏡・スイス(写真展、10.29~11.6) ■海外移住から見たアルゼンチン(写真展、11.19~11.27) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第4回、テーマ:民話、12.17~12.25)

1984年(昭和59年) ■スイスの若き写真家たち(写真展、2.25~3.4=神奈川県民ギャラリー、3.10~3.18=小田原市中央公民館、3.23~3.27=平塚梅屋テアート) ■現代オランダ版画2人展(6.23~7.8) ■モリソンの一眼レフ日本記(写真展、7.21~8.5) ■パネルと写真で綴るメリーランド(8.11~8.26) ■かいまみたネパール(写真展、9.1~9.16) ■ヘレン・マッキー版画個展(10.2~10.14) ■われわれの国DDR(写真展、11.17~11.25) ■現代ニュージーランド版画展(12.1~12.9) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第5回、テーマ:地図と絵本、12.15~12.23)

1985年(昭和60年) ■カナダの自然と交通(写真展、3.9~3.24) ■カナダ・ガストン・プチ絵画展(4.17~4.24=秦野市文化会館) ■フローラ・ダニカ—デンマーク花の刺繍展(5.24~6.2) ■南西ドイツの街を訪ねて(写真展、10.19~10.31) ■いろんな国のいろんな人と(写真展、11.12~11.24) ■メリーランド・バーデン・ヴェルテンベルク写真展(12.19~12.26=平塚市民プラザ) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第6回、テーマ:アジアの絵本、12.21~12.28)

1986年(昭和61年) ■ニュージーランドのある1日(写真展、4.26~5.25) ■ユダヤ教に生きる人々(写真展、7.5~7.27) ■オランダの現代アーティストたち—美術と音楽(写真・版画・絵画展、9.24~10.12) ■世界の絵本展—ヨコハマ(第7回、テーマ:新刊絵本、12.19~12.27)



シンガポール書画美術展(1983)



The organization by your association was very efficient and professional and the New Zealand Embassy and I felt as a first exhibition of paintings in Japan much was learned that will benefit future visiting exhibitions from our country.

The home-stay visit you organized for myself and husband with Mr. and Mrs. Watanabe was much appreciated also. They were gracious and considerate of our needs and their care contributed to good memories of Yokohama and the whole venture.

Once again, I am deeply appreciative of your efforts on my behalf. The exhibition was another link in international understanding something so dear to your heart and something important to foster in this uncertain world of ours.



Best wishes,

Ronda Greig

Ronda Greig

ロンダ・グリーグさんから(1983)

講演会・座談会

SPEECHES/DISCUSSIONS



「私の国・トルコを語る」(1986)

講演会は、なるべく幅広い分野から、しかし一般の人にも親しみやすいテーマを選んで数多く開催してきました。ときには時事解説的なものをまじえ、最新の国際情勢について紹介するいっぽう、折に触れ、来日中の外国人専門家を囲んだ座談会も開催しました。

1981年(昭和56年)から始めた英語講演会は、広い意味での英語圏出身者に、通訳を介さず直接自分の言葉で語ってもらうユニークな講演会です。翻訳によって失われる微妙なニュアンスをも正しく伝えられたらという狙いで設けたものです。一種の実験ではありましたが、結果的には話題や講師に多様性を持たせることができた外国人参加者も含めて毎回多くの聴衆を迎える催しになりました。

テーマと講師(敬称略・肩書きは当時)

1977年(昭和52年) ■イランについて(紅山雪夫=旅行ジャーナリスト、10.1)
■青年海外協力隊事情(波多 朝=協力隊事務局、11.4) ■ブラジル事情(桑原マリア=ブラジル大使館、11.6) ■海外移住事情(押本直正=国際協力事業団横浜支部長、11.9) ■アルゼンチン事情(光田友宏=ブエノスアイレス在住、11.12) ■パラグアイ事情(荒横文彦=パラグアイ在住、11.13) ■最近の国際情勢と国連(村角 泰=外務省参事官、12.10) ■アジアのめぐまれない子供たち(小野五兵衛=日本ユニセフ協会募金部長、12.10)

1978年(昭和53年) ■今日のスウェーデン(ラーシュ・ヴァリュー=スウェーデン大使館、9.2) ■スウェーデンの織物(山梨幹子=スウェーデン織物研究所、9.3) ■私にとってのスウェーデン(ブッセ・ベリルンド=旅行ジャーナリスト、9.9) ■ポーランド人の日常生活(S・ペルコブッチ夫人=ポーランド大使夫人、11.11) ■子供のための本(W・ジュークロフスキ=作家、11.19) ■現在のルーマニアとその歴史(ラドウ・ボグダン=ルーマニア大使、11.25)

1979年(昭和54年) ■日本語、英語ここが違う(国弘正雄=国際商科大学教授、2.12) ■レターメンと語ろう(2.12) ■ラテン・アメリカ—その光と影(菊地育三=朝日新聞前ラテンアメリカ支局長、2.24) ■カナダの生活と文化(R・V・ゴースラム=カナダ公使、3.31) ■デンマーク刺繍について(山梨幹子=ヤマナシ・ヘムスロイド代表、4.14) ■今日のデンマーク(B・C・リンドブラッド=デンマーク領事、4.21) ■ルーマニア・民族と文化(イオン・スクンピエル=ルーマニア大使館文化担当官、5.12) ■ブラジル生活奮闘記(田村茂雄=前神奈川県サンパウロ駐在員、6.23) ■スペインと日本の美術(ホセ・アルフォンソ・クニ=画家、7.21) ■今日のDDR(ヘルマン・ヘーバー=ドイツ民主共和国大使館文化担当官、10.28)

1980年(昭和55年) ■西アフリカに生活して(片山醇之助=元リベリア大使、3.1) ■大サバンナの生活と文化(富山盛道=アジア・アフリカ言語研究所、3.8) ■アラブ人の気質とイスラム精神(ムサ・M・オマール=イスラム・センター、3.15) ■オーストラリアの人と生活(J・ティミンズ=クインズランド州政府東京事務所、寺本不二子=カンタス・オーストラリア航空広報担当、6.21) ■オーストラリア・移住受入の実情(長瀬 威=国際協力事業団、6.28) ■空翔ける男達を囲んで(カンタス航空機長、6.29) ■記者の目で見たオーストラリア(青木 公=朝日新聞元シドニー特派員、7.5) ■チュニジア昨今(牟田口義郎=朝日新聞論説委員、7.19) ■オフィスの中のコミュニケーション(パトリシア・デイトリ=アメリカ・ミシガン州立大学教授、9.6) ■アルゼンチン事情(伊原義一=元商社駐在員、10.25) ■私の見たアフガニスタン難民の現状(U・D・カーン・ユスフザイ=アラブ・ニュース日本特派員、11.15) ■ダキア王とローマの皇帝たち(鈴木四郎=日本ルーマニア友好協会、11.29)

We constantly offer a variety of speeches covering themes familiar to the public. Some are lectures on a timely topic; others involve informal discussion between a specialist and the audience.

In 1981, the English Speech Series entitled "Talking across Gaps" was started to help narrow the gaps in bilateral communication and international understanding. This popular program has seen 33 guest speakers from such varied English-speaking nations as Bangladesh, the Philippines, Canada, Britain, and the United States. They have presented unique views on topics ranging from American journalism to Kabuki.

1981年(昭和56年) ■ネパール・人と心(岩村 昇=神戸大学教授、3.14) ■ハンガリー音楽の系譜(後藤田純生=NHKディレクター、4.4) ■変りゆくアラブ(阿部政雄=東海大学講師、5.30) ■ベルリン国立歌劇場オーケストラと語ろう(6.7) ■スウェーデン児童文学者ベリーストロム女史と語る(6.10) ■カナダ版画芸術の現状(ガストン・プチ=美術家、6.27) ■パルテノンをめぐる(三浦一郎=上智大学教授、10.3) ■私とキューバ音楽(見砂直照=元キューバン・ボーイズ、12.5) ■スウェーデン消費者オンブズマンと語る(スヴェン・ホールグレン、12.10) ■キューバの歴史(加茂雄三=青山学院大学教授、12.12) ■「世界の絵本展」関連講演と絵本の読み聞かせ(アン・ヘリング=法政大学助教授、徳永喜昭=祐学社、12.19・12.20)

1982年(昭和57年) ■外国人になった日本人(今村忠雄=日本海外協会理事長、バリー佐伯=米国日系市民協会日本支部長、6.26) ■中東紛争とイスラエルのレバノン侵攻(小高正直=前シリア大使、7.24) ■ポーランド・軍政と市民生活の実情(蔵原惟堯=朝日新聞前ワルシャワ特派員、10.9) ■国際情報の読み取り方(倉田保雄=国際問題評論家、11.6) ■老化のプロセスと老人心理(ヤーン・ヘランデル=スウェーデン国立ルンド大学教授、12.3) ■「世界の絵本展」関連講演と絵本の読み聞かせ(青木久子=絵本研究家、三浦克子=ストーリー・テラー、徳永喜昭=祐学社、12.25・12.26)

1983年(昭和58年) ■PLO撤退後の中東(小山茂樹=中東経済研究所常務理事2.26) ■吉田ルイ子のニューヨーク黙視録(吉田ルイ子=フォト・ジャーナリスト4.9) ■アジアは人間を知るところ(村山元英=千葉大学教授、5.7) ■中央アメリカ虫瞰紀行(田森良昭=フリー・ジャーナリスト、10.1) ■スイス・その質実さのみなもと(澤根文利=ユーロセンター・ジャパン代表、10.29) ■地球が危い——環境問題10年の変貌(加藤 迪=NHKチーフ・ディレクター、11.12) ■アルゼンチンという国(末次輝雄=国際協力事業団海外移住センター所長、11.19) ■「世界の絵本展」関連講演「日本民話をたずねて」(沼田曜一=俳優、12.18)

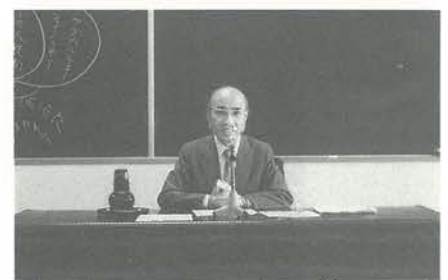
1984年(昭和59年) ■スイス・もうひとつのみどころ(J・F・ゲラー=スイス大使館文化担当官、2.25) ■難民救援活動——そのありがた(星野昌子=JVC事務局長、3.3) ■国際化社会と街づくり(ウルフ・ホード・オブ・セゲルスタット=スウェーデン建築デザイナー、3.10) ■足ながおぼさんの幸せ(三宅恵子=児童文学者、7.14) ■アフリカ飢餓難民——難民問題の意味するもの(伊藤正孝=朝日ジャーナル編集委員、9.29) ■アフリカの人々と生活——青年海外協力隊の体験から(11.17) ■ヨーロッパ人の発想法(木村尚三郎=東京大学教授、12.8)

1985年(昭和60年) ■自立に向かうアフリカの人々(楠原 彰=国学院大学教授、1.26) ■カナダ・最近の移住受入事情(ローレンス・キャロル=カナダ大使館参事官、3.9) ■変わる東欧社会(南塚信吾=千葉大学助教授、3.30) ■いま北朝鮮の人びとは(森 義人=神奈川新聞論説委員、6.29) ■“国際誤解学”のこころみ(箕輪成男=国連大学学術情報局長、7.27) ■海外協力の哲学(川喜田二郎=ヒマラヤ技術協会代表理事、9.28) ■発展途上国の現地から(前川 誠=フリー・カメラマン、11.2) ■21世紀の海外定住を考える(仁科雅夫=国際協力事業団東京支部長、11.9) ■海外開発青年を囲んで(11.9) ■これからの日本と東南アジア(グントン・インタラタイ=京都精華大学教授、11.30)

1986年(昭和61年) ■私の国・トルコを語る(イルハン・オウス=トルコ大使館文化広報官、2.1) ■日本人の国際化(鳥羽欽一郎=早稲田大学教授、2.22) ■ユーゴスラビアを語る(ボーダ・ミヤルコヴィッチ=日本ユーゴスラビア友好クラブ事



「消費者オンブズマンと語る」(1981)



「“国際誤解学”のこころみ」(1985)

務局長、5.10) ■“サンベルト”から見たアメリカ(石川 好=日米問題研究家
6.14) ■日本の“開国”再考(マリオン・ウィリアムスチール=国際基督教大学
準教授、11.12)

1987年(昭和62年) ■ネパールを語る(ビノッド・シュレスタ=国際交流学生会委
員長、2.28) ■東南アジアの生活文化(金子量重=アジア民族造形文化研究所所長
3.14) ■オーストラリア——その市民生活と日本人(堀 武昭=元豪日交流基金ア
ドバイザー、3.28)

英語講演会“英語で語る世界の周辺”

1981年(昭和56年) ①アメリカン・ジャーナリズム(バーナード・クリッシャー
=フォーチュン誌支局長、4.11) ②四人組以後——中国のジェネレーションギャッ
プ(ジュレミー・バーマー=中国研究者、5.9) ③異文化への乗り換え——脱線物
語(マイケル・オコンネル=コラムニスト、6.6) ④アメリカの日系人——強制隔
離とその後(パリー・佐伯=米国日系市民協会日本支部長、10.24) ⑤女性と機会
均等——スウェーデンでは(パールブロー・ダールブムハル=経営コンサルタント
11.14)

1982年(昭和57年) ⑥日独交流一世紀小史——OAGを通して(エルンスト・ロ
コヴァント=ドイツ東洋文化研究協会主任、4.24) ⑦エネルギー展望——資源国か
ら(アイヴァン・バムステッド=カナダ・アルバータ州政府東京事務所長、5.29)
⑧太平洋の隣国・ニュージーランドと日本(R・M・ミラー=駐日ニュージーラン
ド大使、6.19) ⑨日本映画のリアリティー(ドナルド・リチー=評論家、10.30)
⑩刺青——いれずみ(ドナルド・リチー=評論家、12.4) ⑪歌舞伎のいろは——助
六を通して(ヴァレリー・ダラム=日本文学研究者、12.11)

1983年(昭和58年) ⑫イデオロギーとしての英会話(ダグラス・ラミス=津田塾
大学教授、4.30) ⑬“戦争の魅力”と日本憲法(ダグラス・ラミス=津田塾大学教
授、5.28) ⑭ルリーの「政治漫画から身を守る法」——その時世界の指導者は(ラ
ナン・ルリー=政治漫画家、6.25) ⑮日本の南アジア開発援助——バングラデシュ
を中心にして(A・U・チョードリー=ダッカ大学準教授、10.15) ⑯夏日漱石・
非人情から則天去私まで(アラン・ターニー=清泉女子大学教授、11.13) ⑰日本
語のおもしろさ(ノア・ブラネン=国際基督教大学教授、12.10)

1984年(昭和59年) ⑱国際結婚——アメリカ人と日本人の場合(デイヴィッド・
オーウェンズ=社会心理学者、4.28) ⑲演劇的日本人(ロジャー・パルヴァース=
劇作家、5.26) ⑳コンピューター・エイジ——世界の情報が茶の間とつながる日(ハ
ンター・ブラムフィールド=テクニカル・アドヴァイザー、6.30) ㉑血の通った国
際ビジネスとは(ジェームズ・クレマー=メリーランド大学、10.27) ㉒外国人
の見た鎌倉(マイケル・クーパー=上智大学、11.24)

1985年(昭和60年) ㉓英文出版物を見る目を養おう——編集者の喜びと苦勞(ス
ザンヌ・トランブル=EDS Inc. 副社長、4.27) ㉔法華経の話——インド、中国、
日本での変遷(テリー・アボット=仏教研究者、5.25) ㉕尺八・一音の美学(クリ
ストファー・ブレスデル=邦楽家、7.6) ㉖日本の戦後40年——アメリカからの視
点(ジョン・バーゲス=ワシントン・ポスト紙東京特派員、10.26) ㉗日本の国
籍法と私(ベバリー・ナカムラ、アイコ・カーター、12.7)

1986年(昭和61年) ㉘スモッグ、ハイ・テク、サクラの国?——カナダから見た
日本(ジュリス・レニックス=アルバータ大学準教授、4.26) ㉙日本とフィリピン



「刺青」(1982)



「尺八・一音の美学」(1985)

—問題と課題 (ルーベン・L・F・アビト=上智大学教授、5.24) ㊸アラン・ブ
ースの日本見聞録—日本縦断3,300キロの旅(アラン・ブース=コラムニスト、7.
5) ㊹禁じられた原爆報道 (モニカ・ブラヴ=スウェーデン・スヴェンスカ・ダー
グブラーデット紙特派員、10.18)

1987年(昭和62年) ㊺日本映画の海外版はこうして作られる—「男はつらいよ」
製作裏囁 (ウィリアム・ロス=フロンティア・エンタープライゼス社、1.24)



「政治漫画から身を守る法」(1983)

English Speech Series: TALKING ACROSS GAPS

1. AMERICAN JOURNALISM
Barnard Krisher, Journalist, April 11, '81
2. AFTER THE GANG OF FOUR – CHINA'S GENERATION GAP
Geremie Barmé, Sinologist, May 9, '81
3. SWITCHING AND DERAILMENTS – CROSSING THE CULTURAL TRACKS
Michael O'Connell, Columnist, June 6, '81
4. BACKGROUND LEADING TO RELOCATION AND REDRESS – EXPERIENCES OF JAPANESE AMERICAN IN THE UNITED STATES
Barry Saiki, Oct 24, '81
5. WOMEN AND EQUAL OPPORTUNITY IN SWEDEN
Barbro Dahlbom-Hall, Nov. 14, '81
6. A BRIEF HISTORY OF THE LONG HISTORY OF GERMAN-JAPAN EXCHANGE ... AS SEEN THROUGH THE ACTIVITIES OF OAG
Ernst Lokowandt, Apr. 24, '82
7. ENERGY PROSPECTS & PROBLEMS – CANADA'S ENERGY PROVINCE ALBERTA
Ivan Bumstead, Government of Alberta Tokyo office, May 29, '82
8. NEW ZEALAND AND JAPAN AS A PACIFIC PARTNER
R. M. Miller, New Zealand Ambassador, June 19, '82
9. JAPANESE FILM: SOME VERSIONS OF REALITY
Donald Richie, Writer & Critic, October 30, '82
10. IREZUMI: THE JAPANESE TATTOO
Donald Richie, December 4, '82
11. THE ABC'S OF KABUKI THROUGH SUKEROKU
Valerie Durham, Japanologist, December 11, '82
12. ENGLISH CONVERSATION AS IDEOLOGY
C. Douglas Lummis, April 30, '83
13. THE ATTRACTION OF WAR
C. Douglas Lummis, May 28, '83
14. HOW DO JAPANESE, U.S. & WORLD LEADERS 'DEFEND' THEMSELVES FROM POLITICAL CARTOONS?
Ranan Lurie, June 25, '83
15. JAPAN'S FOREIGN AID TO SOUTH ASIA WITH PARTICULAR REFERENCE TO BANGLADESH
A. U. Chowdhury, Dacca University, October 15, '83
16. NATSUME SOSEKI: FROM HININJO TO SOKUTENKYOSHI
Alan Turney, Seisen Women's College, November 13, '83
17. THE PLEASURE OF DISCOVERING THE JAPANESE LANGUAGE
Noah Brannen, ICU, December 10, '83
18. AMERICAN-JAPANESE CROSS CULTURAL MARRIAGES
David Owens, April 28, '84
19. THE THEATRICAL JAPANESE
Roger Pulvers, Playwright & Director, '84
20. THE COMPUTER INFORMATION AGE: HOW TO STUFF THE WORLD'S KNOWLEDGE INTO A 6-TATAMI MAT ROOM
Hunter Brumfield, Technical Adviser, June 30, '84
21. THE HUMANIZATION OF INTERNATIONAL BUSINESS
James Cramer, Maryland University, October 27, '84
22. KAMAKURA THROUGH FOREIGN EYES
Michael Cooper, Sophia University, November 24, '84
23. LIVING A DOUBLE LIFE: THE JOYS AND SORROWS OF ENGLISH-LANGUAGE PUBLISHING IN JAPAN
Suzanne Trumbull, EDS Inc., April 27, '85
24. THE HISTORY OF THE LOTUS SUTRA IN INDIA, CHINA AND JAPAN
Terry Abbott, Researcher of Buddhism, May 25, '85
25. THE SHAKUHACHI: AESTHETICS OF A SINGLE TONE
Christopher Blasdel, Shakuhachi Performer, July 6, '85
26. FORTY YEARS LATER: A YOUNG AMERICAN'S VIEW OF JAPAN AND WORLD WAR II
John Burgess, Washington Post correspondent, October 26, '85
27. JAPAN'S NATIONALITY LAW AND ME
Beverly Nakamura & Aiko Carter, December 7, '85
28. IS IT SMOG HI-TECH, OR CHERRY BLOSSOMS? – CANADIAN VIEW OF JAPAN
Juris Lejnicks, University of Alberta, April 26, '86
29. JAPAN AND THE PHILIPPINES: PROBLEMS & TASKS
Ruben L. Habito, Sophia University, May 24, '86
30. THE ROADS TO SATA – A 3,300 KILOMETER WALK THROUGH JAPAN
Alan Booth, Columnist, July 5, '86
31. THE ATOMIC BOMB SUPPRESSED: AMERICAN CENSORSHIP IN JAPAN 1945-1949
Monica Braw, Svenska Dagbladet, October 18, '86
32. INSIDE STORIES OF MAKING AN OVERSEAS VERSION OF THE FILM, "A MAN'S LIFE IS TOUGH"
William Ross, January 24, '87



「日本とフィリピン」(1986)

公演・映画会

PERFORMANCES/FILM SHOWS



シドニー弦楽四重奏団(1984)

本国で高い評価を受けている中堅の音楽家や舞台人でも、知名度優先の日本の興行界にはなかなか受け入れてもらえません。協会ではこうした海外の芸術家が日本へ立ち寄る機会をとらえて、積極的に県内での公演の機会を提供してきました。いずれも出演料なし、公開も無料という親善公演の形を採りましたが、出演者の快諾を得、一般の興行とは違った、心の通う催しとなりました。

映画会では、一般の劇場などで上映される機会の少ない作品を選ぶように心がけてきました。しかし、映画通のための映画会ではなく、世界各地で人々がどのような日常生活をし、何をどう考えているかを感じてもらうことを第1の眼目としています。欧米の映画以外は日本語字幕付きのものが非常に少数のうえ、会場や版權等の問題もあって、上映には常に困難が伴いましたが、1982年と1985年には国際交流基金の協力で2つの大きな映画祭を実現することができました。なお、こうした劇映画の上映会とは別に、講演や展示に際して数多くの海外紹介映画や観光映画も上映してきました。

1978年(昭和53年) ■ポーランド劇映画「灰とダイヤモンド」ほか6本上映(2.21 ~ 2.26) ■スウェーデン劇映画「叫びと囁き」上映会(8.26) ■ポーランド劇映画「地下水道」ほか3本上映(11.12、11.18)

1979年(昭和54年) ■ルーマニア民族音楽演奏会(5.12、5.19) ■ゲルハルト・ベルグ・ピアノ演奏会(10.27)

1980年(昭和55年) ■パキスタン民族舞踏団公演(4.11=神奈川県民小ホール)

1981年(昭和56年) ■ベルギー・デュオ・クロムランク・ピアノ演奏会(5.26=横浜市教育文化ホール)

■アメリカ・マスターシンガーズ合唱団公演(7.2=横浜市教育会館ホール)

■ギリシャ記録映画「アクロポリスの丘は語る」上映会(10.3) ■スウェーデン・インゲル・ヴィクストロム・ピアノ演奏会(10.20=横浜市教育会館ホール)

■ニュージーランド劇映画「オフ・ジ・エッジ」上映会(10.31)



デュオ・クロムランク(1981)

1982年(昭和57年) ■ニュージーランド・ゲイリー・ブレイン打楽器演奏会(1.15=秦野市文化会館、1.16=平塚市立なでしこ小学校) ■スイス劇映画「僕等が子供だった頃」上映会(2.20) ■タイ劇映画「トンパン」上映会(2.27) ■カナダ・アルバータ弦楽四重奏団演奏会(5.17=横浜ヤマハ友の会ホール) ■カナダ劇映画「アントワヌ伯父さん」「誰が風を見たか」上映会(5.23=横浜・シルク博物館ホール、6.11=茅ヶ崎市民文化会館、6.15=藤沢市労働会館) ■チェコスロバキア劇映画「プラハの解放」上映会(6.13=横浜・シルク博物館ホール) ■ポーランド劇映画「大理石の男」上映会(7.31=横浜・シルク博物館ホール) ■スウェーデン・クラフォード室内楽団演奏会(8.17=横浜市教育文化ホール) ■スウェーデン音楽映画「魔笛」上映会(9.18=横浜・シルク博物館ホール) ■ヨーロッパ観光映画会(10.24) ■南アジア名作映画祭(12.13~12.17=神奈川県民ホール) ■アルピオン座朗読劇「不思議の国のアリス」(12.21)

1983年(昭和58年) ■インド劇映画「苦いひとくち」上映会(2.5) ■韓国劇映画「黄昏」上映会(3.5) ■スペイン劇映画「すばらしい友だちアントニーノ」(4.2=横浜・シルク博物館ホール) ■カナダ・ショーナ・ロールストン親善チェロ・リサイタル(7.19=鎌倉市中央公民館)

Foreign performers who are unfamiliar with the Japanese music/stage scene often need help in facilitating programs. Responding to the requests from these professionals, KIA has organized a number of free concerts and stage presentations.

Supporting the aims of the Association, these performers have kindly played free of charge. Thus the public was treated to piano recitals, chamber music, and folk dances by eminent artists from many nations. These performances have received the warm acclaim of our appreciative audiences.

Cinema is very potent in terms of vivid portrayals of life in different countries. We have tried to offer films not commonly shown in commercial movie houses. However, the requirement of Japanese subtitles and copy rights are always stumbling blocks. In 1982 and 1985, thanks to the assistance of the Japan Foundation, we were able to hold week-long festivals of South Asian films and African films respectively.

1984年(昭和59年) ■ オーストラリア・シドニー弦楽四重奏団演奏会(5.11=神奈川県民小ホール) ■ タイ記録映画「バッタナ共同体」上映会(10.20)

1985年(昭和60年) ■ スウェーデン民俗音楽と映画の会(3.31) ■ 神奈川アフリカ映画祭(6.19~6.22) ■ ドイツ・カマーデュオ親善コンサート(9.12=神奈川県民小ホール)

1986年(昭和61年) ■ オランダ・ウイル・オッフエルマンス・フルート演奏会(10.4)



(1985)



(1982)

Karlsruhe, September 20, 1985

We returned safely to Germany on Monday this week and started our daily teaching. But our thoughts often go back to Japan, where had such a wonderful time.

One of the most pleasant experiences were the two days which we spent with you in Yokohama. The warm welcome and the friendly atmosphere which you offered to us made us feel like friends who had known already since a long time. And our concert-audience in Yokohama was a very good one, we could feel how they liked and responded to our music. All this we will never forget.

With our warmest greetings thankfully yours.



Peter Brock
Berthold Fritz
Peter Brock
Berthold Fritz

カマーデュオから(1985)

アルピオン座朗読劇(1982)



ショーナ・ロールストン(1983)



スウェーデン・ウッタ・クリュス(1985)



キヌタ・長津島舞団(1980)



日本語スピーチ大会 「外国人、 大いに語る」

Japanese Speech Competition
"FOREIGN RESIDENTS
SPEAK OUT"

1985年から始めたこの催しは、日本在住の外国人に自由なテーマで日頃の考えを発表してもらい、日本語を共通語としてお互いの理解を深めようとする催しです。したがって、コンテスト形式を採ってはいないものの、日本語の上手下手を競うのではなく、スピーチの話題や展開に審査の重点を置いています。出場資格に在日期間による制限を設けていないのもそうした趣旨からです。また、内容的にも単なる日本の印象の発表といったものを脱して、幅広い意見発表の場とすることを目指しています。

受賞者とテーマ

1985年(昭和60年) 3月3日・神奈川県民小ホール

会長賞 ■ チャー・イン・メイ(マレーシア)……………「まさしくコンビニエンス」

入賞 ■ ドミトリー・ストレリツォフ(ソビエト)

……………「日本人は詳しい説明がなぜ好きか」

入賞 ■ 金 丞振(韓国)……………「日本語と敬語のある文化」

※応募者数=24名 (11ヵ国・地域)

1986年(昭和61年) 3月9日・神奈川県民小ホール

会長賞 ■ アントニー・オンボ(パプア・ニューギニア)……………「わかりにくいカタカナ語」

入賞 ■ アンバーリン・シディキ(パキスタン)……………「私と日本」

入賞 ■ セルゲイ・ロバノフ(ソビエト)……………「姫路とイメージ」

※応募者数=29名 (20ヵ国・地域)

1987年(昭和62年) 3月1日・神奈川県民小ホール

会長賞 ■ ジョハナ・マンソン(アメリカ)……………「人間と間」

入賞 ■ 張 瓊瑜(台湾)……………「スーパーマーケットで見た日本人の国民性」

入賞 ■ 鄭 慧玲(ヴィヴィアン)(香港)……………「農場での一夏」

※応募者数=29名 (14ヵ国・地域)

This speech competition in Japanese was started in 1985 to give an opportunity for foreign residents to express themselves in the community, for better mutual understanding.

Therefore, the primary emphasis is placed on the delivery of vivid views, rather than on command of the Japanese language. The participants vary in their duration of stay in Japan from several months to decades.

We hope this program will develop to present even broader views and interesting stories, from which their Japanese neighbors will learn about the diversity of culture, represented by the contestants.





「まさしくコンビニエンス」 チャー・イン・メイ

……私はおもわずまわりを見まわして、人影のないことを確かめ、そのテレビをもう一度見つめました。一時は、ひろうゆう気がなく、そのまま前を通りすぎました。でも、テレビの姿がわすれられなく、元の場所に戻りました。そして、ゆうわくに負けてしまって、テレビを持って家に帰りました。つけてみると、テレビはびっくりするほど良く映りました。白黒テレビですが、苦学生の私にとって、これは天からのめぐみにみえました。日がたつにつれて、テレビだけではなく、私の望んだ物、何でも手に入りました。もちろん、ほしかった物は手に入るのに時間がかかりましたし、思ったとうりの順番ではもらえませんが、ほしかった物は必ず手に入りました。まさしく、コンビニエンスですね。……

ところが、粗大ゴミをひろう経験が多くなるにつれて、私はもう一つのことを気がつきました。日本人は物に対する愛着心もないから、物をそまつに扱ってしまうのではないのでしょうか。……

最近、ゴミについて、また新しいことを勉強しました。日本人は物だけを使い捨てていると思っていたのですが、きびしい日本社会の中で日本人は人間まで使いすてにしているのではないのでしょうか。……

「わかりにくいカタカナ語」 アントニー・オンボ

……カタカナ語のはらんを見て、日本語はみだれてるとか、日本語らしい表現をもっと使うべきだという人も多いようですが、私は必ずしもそうは思いません。

たしかにゴルフのクラブの宣伝で「クラブリンクスは、日本人にジャストフィットするクラブです」とか「オレンジ・ゴフレットは、ソフトタッチな高級焼菓みにオレンジクリームをサンドした菓子です」などというのは、ちょっとカタカナ語の使いすぎのような気がします。

でも、日本語の中にいくらカタカナ語が入ってきても、日本語の基本的な骨組みは、くずれたりはしないように思います。「ちょうどびったりする」を「ジャストフィットする」といったところで、文構造は日本語本来のものです。

ただ、私たち外国人にとって困るのは、「朝日カルチャーセンター」を「アサカル」とちぢめたり、「ワード・プロセッサ」を「ワープロ」といったりする短縮形です。ただ「アサカル」と聞いただけでは、本当に何を意味しているのかよくわかりません。……



「人間と間」 ジョハナ・マンソン

……ここで家の建て方の違いを持ち出してみましよう。プライバシーは、人間にとって大変大切な事でしょう。しかし、アメリカ人と日本人のプライバシーの守り方は、大きく違ってきます。たとえば、私が初めて日本でホームステイをした京都の家では、障子とか襖だけで分かれていました。もちろん自分の部屋がありましたが、音楽を聞きたい時に、聞きたくない人にも聞こえてしまう事を考えて、ヘッドホンを使わなければなりません。フロリダ州の家では、厚い壁とドアのお陰で、音楽をヘッドホンなしで楽しみました。窓からは風をそよぐ木立が見えたものでしたが、京都の家では、窓から手を伸ばすと、隣の家に触れたのには本当に驚きました。もう一つ驚いた事は、私達アメリカ人は生まれた時から自分のベッドに眠り、一歳から自分の部屋を持つのが普通ですが、京都の家では二歳の子供は、まだ両親と一緒に寝ていましたし、そのほかの子供達は、同じ部屋で勉強をしたり、テレビを見たり、いつも一人になる事がない生活を見ると、不思議に思いました。でもこの生活から、「見て見ぬふり、聞いて聞かぬふり」という知恵が生まれて来たのかもしれない。……

人の交流

EXCHANGE OF PEOPLE



ホーム・ステイ登録家庭、工藤さん宅で(1986)

協会ではホーム・ステイを軸とするさまざまな人的交流の場を、折に触れて設けてきました。

ホーム・ステイは在県の外国人留学生や観光以外の目的で来県する外国人に対し、一般日本人家庭を体験する機会を与えるものです。こうした趣旨や、受入家庭には無償の活動となること、さらに日本の住宅事情などから、1～2泊を原則としてきました。受入家庭は協会会員の中から募っていますが、特に資格や条件を問うものでなく、1987年3月現在、100を超える家庭が受入家庭に登録しています。

海外からの人の**招聘**では、1983年以降毎年、専任英語講師1名をアメリカ・メリーランド州から招きました。これは、招聘者に日本での研究の機会を与えるかわり、協会の語学講座を担当してもらうというWork / Study Grantの形式をとり、神奈川県友好州であるメリーランドとの実際的な交流を促す意味もこめた事業です。

一方、海外への**派遣**は財源などの問題でなかなか実現が困難でしたが、1982年に神奈川新聞の記者をメリーランドへ派遣、現地の実情を取材・発表してもらったほか、1986年にはホーム・ステイ登録家庭の中からニュージーランド訪問団を組織し現地の家庭に入ってホーム・ステイを“逆体験”してもらいました。

毎年、神奈川県が招聘する「海外技術研修生」に対しては、日本語の集中講座と並行して、彼らの日本滞在中、話し相手や相談相手になってもらえるような“里親”を会員の中から募りました。また、1986年には、こうした輪を県内各地の大学や企業で学ぶ留学生・研修生に広げることをめざして「留学生・研修生受入協力家庭」を設けました。同じ年、試みに開いた「在日外国人のための生活オリエンテーション」も、来日したばかりで日本の生活に不慣れな人たちに対する支援活動として、軌を一にするものです。

このほか、インド・サイクリストとの交歓会、ニュージーランドの料理シェフと協会会員で組織する南サークルとの“料理交換会”など、気軽な交歓の場や、ときには、県内の国際交流団体との連絡会といった“国内交流”の機会も提供してきました。

On a personal level, the Association is meeting the growing number of requests for exchange opportunities from international visitors and foreign students studying in Japan. Host families registered in our home stay program have expanded to more than 100, while approximately 150 families have been newly solicited all over the prefecture to assist foreign students in the community.

In 1983, we initiated the KIA Work/Study Grant Program for Kanagawa's sister state, in which educators from the State of Maryland, U.S.A., are given a chance to teach, study and conduct research on selected aspects of Japanese culture. KIA English classes are taught by these Maryland professionals.

We also sent a reporter from a local newspaper to Maryland to gain first hand information for a series of feature stories on Maryland.

As a first trial, in 1986, KIA organized a “culinary” exchange tour with the participation of our registered host families. They demonstrated Japanese cooking and enjoyed the hospitality extended by similar host families in New Zealand.

ホーム・ステイ登録家庭数と受入の推移

年 度	登録家庭数	受入人数
1978(昭53)	33	カナダ・トロント日本語研修生11名
1979(昭54)	32	スリランカ S C I 協会会員など31名
1980(昭55)	39	東南アジア、オーストラリア青年訪日団など29名
1981(昭56)	46	国際交流基金招聘日本研修団・横浜国大留学生など73名
1982(昭57)	54	オーストラリア・ブラックウッド高校訪日団など106名
1983(昭58)	63	欧州青年日本研修団、アメリカ教員訪日団など69名
1984(昭59)	80	欧州青年日本研修団、NZ マスターシェフなど65名
1985(昭60)	97	ブーナ印日協会、欧州青年日本研修団など97名
1986(昭61)	111	NZ クライストチャーチ日本研修団など61名

- 1977年(昭和52年) ■ 会員のつどい (12.17)
- 1978年(昭和53年) ■ ホーム・ステイ受入家庭第1回募集 (6.15~7.30) ■ 会員のつどい (7.20) ■ 海外技術研修生と語ろう (7~8月)
- 1979年(昭和54年) ■ Term-End Gathering (2.12) ■ ホーム・ヴィジット受入家庭を募集 (4.15~4.30) ■ 箱根旧街道散策の集い (7.14) ■ 海外技術研修生と語ろう (7.28~8.25) ■ 丹沢湖めぐりの集い (10.20)
- 1980年(昭和55年) ■ 浮かぶ図書館ロゴス号船上交歓会 (5.10) ■ 海外技術研修生と語ろう (7.26~8.23) ■ 中津溪谷探勝のつどい (11.1)
- 1981年(昭和56年) ■ ニューゼーランド・オークランド・ティーチャーズ・カレッジ訪日研修団との1日交歓会 (4.18) ■ オーストラリア・グラモガン・スクール訪日団ホーム・ステイ (4.25) ■ 海外技術研修生と語ろう (7.25~8.22)
- 1982年(昭和57年) ■ 神奈川新聞・鶴田要一記者をアメリカ・メリーランド州へ派遣 (3.27~4.12) ■ ニューゼーランド・オークランド・ティーチャーズ・カレッジ訪日研修団との1日交歓会 (4.11) ■ 海外技術研修生と語ろう (7.31~8.21) ■ ニューゼーランド・クライストチャーチ・ティーチャーズ・カレッジ訪日研修団との1日交歓会 (8.7)
- 1983年(昭和58年) ■ 海外技術研修生“里親”プログラム (7.16) ■ アメリカ・メリーランド州から専任英語講師ダイアナ・ベイリーを招聘 (10.1)
- 1984年(昭和59年) ■ インド・サイクリストとの交歓会 (5.10) ■ 県内の民間国際交流団体との連絡会 (5.20, 7.19, 12.1) ■ 海外技術研修生“里親”プログラム (8.4) ■ メリーランド州から専任英語講師ブルース・パーディーを招聘 (10.1)
- 1985年(昭和60年) ■ ニューゼーランドのシェフとの料理交歓会 (1.30・1.31) ■ 県内の留学生・研修生関連団体との懇談会 (3.8) ■ 海外技術研修生“里親”プログラム (6.15) ■ アメリカ・メリーランド州から専任英語講師フィリップ・トーズを招聘 (10.1) ■ 民間交流団体・サークルのつどい (11.10)
- 1986年(昭和61年) ■ ホーム・ステイ登録家庭による“ニューゼーランドお台所訪問団”を派遣 (3.15~3.23) ■ ニューゼーランド・クライストチャーチ・ティーチャーズ・カレッジ訪日研修団との1日交歓会 (5.5) ■ 海外技術研修生“里親”プログラム (5.31) ■ 国際交流団体・サークル連絡会 (7.20, 11.30) ■ アメリカ・メリーランド州から専任英語講師ジョン・C・シソンを招聘 (9.1) ■ 在日外国人のための生活オリエンテーション (9.27) ■ 留学生・研修生受入協力家庭募集 (7.15~9.10) ■ 留学生・研修生受入機関との連絡会 (12.12)
- 1987年(昭和62年) ■ 留学生・研修生との1日バスツアー (3.29)



ニューゼーランドのシェフをむかえて (1985)



D・ベイリーさん (1983)



インドのサイクリストをむかえて (1984)

I was very moved by the hospitality and willingness to open their homes to a foreign guest which I experienced with my host family of Mr and Mrs Ochi. The stay with the host family made personal and real many aspects of Japanese life which we had heard about in lectures and discussions.

The stay with the Japanese family was one aspect of the tour that most Irish people wanted to hear about on my return. I was able to tell my Irish friends of the warmth and kindness I experienced and to confirm my belief that our common bonds of friendship bridge the distances between our two countries.

Seamus Hosey

Seamus Hosey

ホーム・ステイ体験者から (1983)

民際交流援助金

PEOPLE-TO-PEOPLE EXCHANGE GRANT



受給第1号、室伏美和さん(1982)

「民際交流援助金」は1982(昭57)年度から始めた事業で、一般の人々が自主的に企画・実行する国際交流の計画を資金面で援助する制度です。当初は海外で実施するプロジェクトに限っていましたが、1984(昭59)年度からは国内プロジェクトも含めることとし、毎年3回に分けて申請を受け付け、審査の上、支給を決定しています。

支給金額は、たとえば海外プロジェクトの場合、個人なら往復航空運賃の半額、団体なら30万円前後ですが、対象となるプロジェクトは、友好親善・調査研究・制作発表等々と幅広く、さまざまな分野の活動に利用してもらえるようになっています。

受給者とそのプロジェクト(敬称略、職業・肩書は当時)

1982(昭57)年度 ■室伏美和(横浜市・学生)＝シリアにおけるイスラム社会に関する学術調査 ■平野 章(茅ヶ崎市・茅ヶ崎市明るい選挙推進協議会会長)＝アメリカ中間選挙の実態調査とメリーランド州での和紙貼絵紹介 ■相模原市国際交流協会(大野 力ほか11名)＝交流代表団のフィリピン訪問とシンポジウム参加 ■下渡敏治(相模原市・大学助手)＝インドの農村構造の実態調査 ■横浜太極拳同好会(鈴木康弘ほか17名)＝太極拳の指導者育成のため中国・北京体育学院で実習 ■相模原武道学園(吉川八郎ほか19名)＝少年交流使節団を中国の上海、無錫へ派遣

1983(昭58)年度 ■厚木少年少女合唱団(富田欣市ほか63名)＝マレーシアのペナン、クアラルンプールなどで親善演奏会を開催 ■田中迪也(横浜市・横浜演劇研究所)＝アメリカおよびカナダの国際演劇祭に参加 ■小田原ちようちん踊り保存会(江ヶ崎高子ほか26名)＝小田原の姉妹都市アメリカ・チュラピスタ等で踊りを披露 ■現代人形劇センター(宇野小四郎ほか12名)＝チェコスロバキア・ブルノ国際デフ・パントマイム・フェスティバルで公演 ■あさみず混声合唱団(大野秀男ほか25名)＝視覚障害者で組織する合唱団がハワイ・ホノルルで公演 ■鎌倉彫教授会(後藤俊太郎ほか19名)＝西ベルリン・ダーレム博物館で鎌倉彫展を開催 ■岡部テル(横浜市)ほか7名＝フィリピン・マニラで押葉美術の展示・実演 ■神奈川県太極拳連盟(鈴木康弘ほか4名)＝中国・武漢で開催された第1回国際太極拳大会に出場 ■相模原武道学園(吉川八郎ほか24名)＝少年使節団を中国の南京、揚州等へ派遣 ■古谷義幸(秦野市・秦野パサディナ友好委員会事務局長)＝アメリカ・テキサス州パサディナとの姉妹都市交流計画を調整のため現地を訪問

1984(昭59)年度 [海外プログラム] ■石田春雄(横浜市・開発途上国児童に画材を送る会)＝横浜・川崎の小中学生の絵とメッセージをインドネシアの学校へ伝達 ■大畑 聡(秦野市)ほか1名＝フィリピン、マレーシアの学校で人形劇と手作り「日本ショウ」を開催 ■穂真書道会(瀬戸峰次ほか51名)＝台湾で日台合同の書展と実演 ■横浜少年ラグビークラブ(有馬弘政ほか28名)＝オーストラリア・シドニー地区の少年ラグビーチームと親善試合 ■田村秀子(横浜市・塾講師)＝在米日本人子弟の現地での教育実態を調査 ■藤沢市サッカー協会(山口雄司ほか37名)＝韓国・ソウルで現地の少年サッカーチームと親善試合 ■上海・瀋陽に神奈川文庫をつくる会(藤田親昌ほか4名)＝中国の書籍寄贈先を訪れ、活用実態を調査 ■中村又蔵(横浜市)ほか1名＝フィリピン国立大学で歌舞伎ワークショップを開催 ■日中友好お母さんコーラス訪中団(瀬藤多恵子ほか45名)＝上海で公演と学校訪問

[国内プログラム] ■国際交流ボランティアみなとグループ＝在日外国人に対する英語による文楽解説講座を横浜市内で開催 ■韓国・朝鮮文化の集い実行委員会＝横浜市内の小中学校で同名の交流集会開催 ■アルバトロス・サッカークラブ＝西ドイツの少年サッカーチームを受け入れ、茅ヶ崎市内でホームステイと親善試合 ■(社)横浜演劇研究所＝「現代世界演劇展」を横浜市内で開催。

The People-to-people Exchange Grant is designed to help citizens who have cherished their own ideas for international relations, and need financial assistance to put them into effect, either abroad or in Japan.

A wide range of projects, such as goodwill activities, research, sports events, and handicraft demonstrations, has taken place as a result of this system.

1985 (昭60) 年度〔海外プログラム〕 ■佐々木英会話サークル (佐々木シャロンほか10名) =アメリカの一般家庭で青少年のホームステイを実施 ■ガールスカウト日本連盟神奈川県支部 (細谷英三子ほか35名) =タイ・スリン県での植林ワーク・キャンプに参加 ■日本女声合唱団 (中田幸子ほか33名) =ニュージーランドとフィジーで日本の歌を紹介 ■上海・瀋陽に神奈川県文庫を作る会 (藤田親昌ほか4名) =中国の書籍寄贈先で活用実態を調査 ■鎌倉少年少女合唱団 (鶴沢祐子ほか43名) =イタリアとフランスで公演、ホームステイ ■日本ライフガード協会 (相沢重男ほか11名) =カナダ交通博で国際水難競技に参加 ■西村建子 (横浜市、専門学校職員) =帰国した元中国残留孤児の里帰りに同行、現地事情を写真で記録 ■藤沢市サッカー協会 (山口雄司ほか38名) =韓国ソウルで少年サッカー・チーム同士の親善試合を実施

〔国内プログラム〕 ■横浜市太極拳協会=中国の太極拳指導者を招いて横浜市内などで講習会を開催 ■国際交流ボランティアみなとグループ=横浜で在県外国人を対象にした歌舞伎紹介のつどい開催 ■南サークル=在県外国人とともに埼玉県川越市のしょう油工場などを見学 ■久里浜高校ボランティア学習クラブ=東南アジアなどからの留学生を横須賀市内の自校に招いて意見交換 ■シオン少年少女合唱団=横浜で韓国の児童合唱団公演を主催 ■国際交流ボランティアみなとグループ=在日外国人女性を招いて藤沢市内でパネル・ディスカッション ■伊澤惣市ほか6名=デンマーク体操チームを横浜に招いて講習と実演 ■世界連邦建設同盟神奈川県協議会=横浜市内で県内の民間海外協力団体の集会開催 ■ヨコハマ・ソウル現代美術展86実行委員会=横浜で日韓両国作家の合同作品展を開催 ■国際交流を考える市民の会=同会10周年の記念講演会を横浜で開催 ■横浜演劇研究所=横浜市内で神奈川県アマチュア演劇祭報告書をかねた展示会開催 ■オイスカ産業開発協力団神奈川県支部=タイの訪日親善使節団を横浜に受け入れ

1986 (昭61) 年度〔海外プログラム〕 ■ふじ邦楽舞踊団 (藤間勲七孝ほか9名) =チェコスロバキアのブルノ国際音楽祭に参加 ■野庭高校吹奏楽部父母会 (清水郁代ほか75名) =カナダ・バンクーバー交通博の「ヨコハマ・デー」に出演 小嶋勲 (小田原市・教員) =オーストラリアで学校間交流の折衝 ■オイスカ産業開発協力団神奈川県支部=タイで青年友好植林フォーラムを実施 ■神奈川県青年海外派遣交友会 (井芹 茂ほか15名) =青年を公募し、マレーシア、シンガポールへ親善派遣 ■横浜演劇研究所 (加藤 衛ほか18名) =チェコスロバキアで開かれるアマチュア演劇祭に出演 ■厚木合唱連盟 (飯田正明ほか20名) =厚木の姉妹都市中国・揚州で交歓演奏会 ■藤沢ジュニア・コーラス (伊集院恭子ほか42名) =オーストリアで開催の日本文化祭に出演 ■ゴールプランダース・サッカー少年団 (徳間和男ほか22名) =中国・揚州で少年サッカーの親善試合を実施 ■藤沢サッカー協会 (番場定孝ほか37名) =韓国・ソウルで少年サッカーの親善試合を実施 ■神奈川県日中友好協会青年部 (鈴木徳昭ほか29名) =中国・上海など3都市を結んで日中青年の合同サイクリング

〔国内プログラム〕 ■国際交流横浜まどかグループ=来日外国人の横浜案内のためのセミナーを横浜で開催 ■鶴見国際交流の会=「世界の民族衣装ショー」を横浜で開催 ■国際交流ボランティアみなとグループ=在日外国人を招いて「国際井戸端会議」を横浜で開催 ■かまくらポスト=鎌倉の生活情報を載せた英文ミニコミ紙を発行 ■アルバトロス・サッカークラブ=西ドイツのスポーツ少年団を茅ヶ崎市に招きホームステイなどを実施 ■野庭高校吹奏楽部父母会=前年交流したカナダの指揮者を招き、横浜市内で演奏会 ■横浜演劇研究所=「現代世界演劇展」を開催



フィリピンとマレーシアで手作りの「日本ショウ」を行なった大畑さん (1984)



フィリピンで歌舞伎ワーク・ショップを開いた中村又蔵さん (1984)

鎌倉市少年少女合唱団はイタリアで歌声を披露 (1986)



情報と資料の 提供・収集

INFORMATION

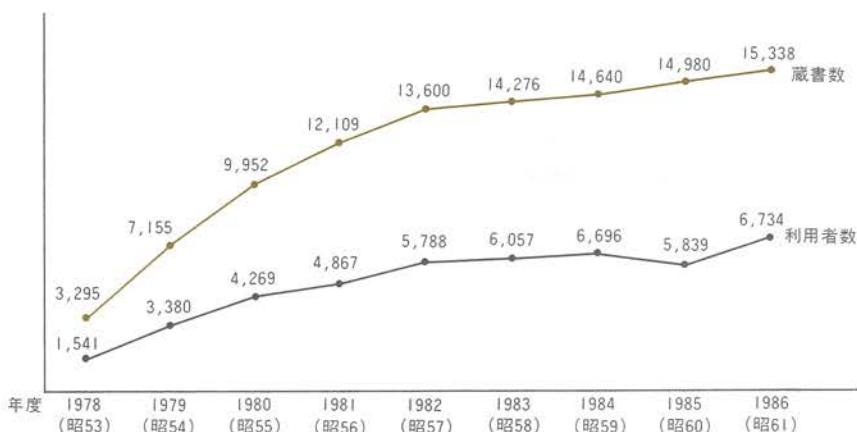


情報化時代とはいえ、国際交流という観点からの情報や資料はまだ充分ではありません。こうした要求に応えるため、協会では海外資料室を中心に情報と資料の提供、収集を行なってきました。

また、外国図書館への書籍送付や、神奈川と関係の深い海外の都市への職員派遣などを通じて情報の相互交換を図り、国内には最新の海外情報が、外国へは日本の生の姿が伝わるように努めてきました。

海外資料室

世界各国の歴史や文化、社会に関する一種の専門図書館として、1978年(昭和53年)11月、海外資料室を開設しました。蔵書類は利用しやすさを考慮して国別の区分法をとり、また、自由に本が選択できる開架式が特徴です。当初の目標だった15,000冊の蔵書を整えた1986年(昭和61年)4月からは、懸案だった館外貸し出しを開始し、利用者の多く、とりわけ外国人利用者から喜ばれました。



海外への書籍送付

海外の図書館へ日本に関する英文書籍を送り始めたのは1981年(昭和56年)。「もっと海外へ日本を知らせる努力を」といわれたころでした。その後、世界各国の日本に寄せる関心はますます強まり、この書籍送付事業は、まさに時宜を得たものとなりました。送り先には、すでに日本関係の蔵書を多く持っているような大きな図書館は避け、送付書籍も美術全集や百科事典など、多くの人に効果的に利用してもらえるようなものを選びました。

一方、こうした書籍送付への返礼も含めて、20か国以上の国々から協会の海外資料室へ書物が寄贈され、蔵書の充実に寄与しました。資料室のニュージーランド、キューバ、東ドイツといった書架には、他ではめったに見られない珍しい原書も数多く並んでいます。

海外への情報提供事業としては、このほか、1980(昭55)年度から神奈川県出身の海外移住者へ書籍と地元紙の神奈川新聞を送ってきました。これは県からの受託業務で、送り先はブラジル、アルゼンチンなど5か国22~24か所です。

こうした送付を受けた海外の図書館や県人会の中には、それらの書籍を「カナガワ文庫」として特別なコーナーを設けているところもあります。

The KIA Library was established in 1978 to collect and disseminate information on foreign countries and Japan. This well-stocked library plays an increasing role as a resource center in the community.

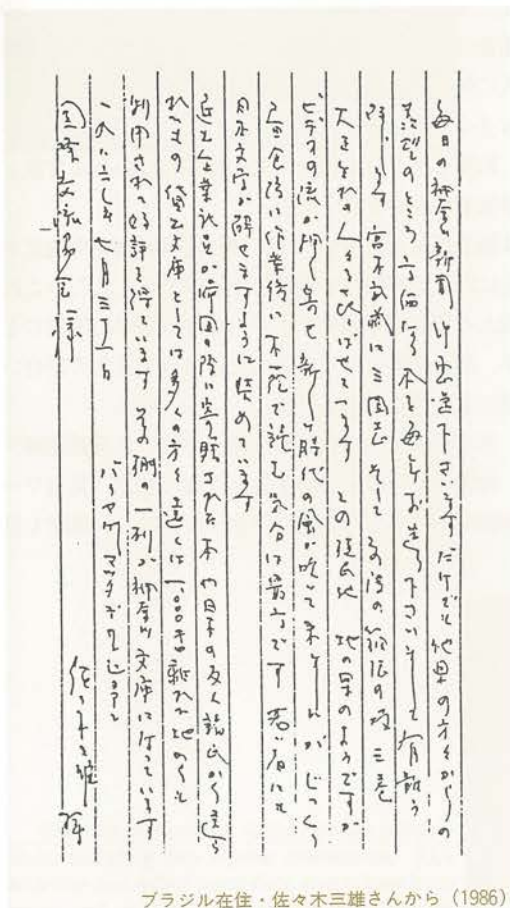
The Association has also promoted active interlibrary cooperation program with overseas libraries. This book donation program has seen a dozen "Kanagawa Corners" set up in various countries. Our library has been, in return, enriched by books from abroad and foreign embassies.

書籍送付先

- スウェーデン・エーテボリ市立図書館.....(1980~1982年度)
- ニュージーランド・オークランド教育大学図書館.....(1980~1982年度)
- オーストラリア・スインバーン工科大学図書館.....(1980~1982年度)
- アメリカ・メリーランド州ロヨラ・ノートルダム大学図書館.....(1982~1984年度)
- インド・ブーナ印日協会.....(1983~1984年度)
- パキスタン情報放送局.....(1983~1985年度)
- 東ドイツ・ベルリン国立図書館.....(1983~1985年度)
- 西ドイツ・国際文化交流協会図書館.....(1985年度~)
- カナダ・アルバータ州レスブリッジ公立図書館.....(1986年度~)
- ニュージーランド・パシフィック・アイランダーズ教育センター.....(1986年度~)



NZパシフィック・アイランダーズ教育センターから届いた「受領証」写真(1987)



ブラジル在住・佐々木三雄さんから (1986)

I found Kanagawa International Association Library very informative and interesting with their wide collection of local and foreign books not only in Japanese and English but also in many other languages. Books on subjects such as literature, history, economics politics, art as well as encyclopedias, dictionaries and travel guide books are just some of the variety of books that are available there. Also up-to-date international magazines, newspapers and business journals in different languages are available.

With KIA library's spacious, warm atmosphere and very accommodating staff, I feel very much at home.



Corazon M. Seki
Corazon M. Seki

海外資料室の利用者から (1986)

海外調査

- 1982年 (昭和57年) ■アメリカ・メリーランド州へ職員1名を派遣。専任英語講師の招聘、図書送付先について調査 (2.25~3.6)
- 1983年 (昭和58年) ■スウェーデン・エーテボリ市など北欧4都市へ職員1名を派遣、現地の国際交流団体を調査 (3.20~4.1) ■タイ・ネパール・インドの5都市へ職員1名を派遣、図書送付先の調査と写真展の素材を収集 (12.3~12.16)
- 1985年 (昭和60年) ■西ドイツ・バーデンヴュルテンベルク州へ職員1名を派遣、図書交換先の調査と写真展の素材を収集 (3.9~3.26)
- 1986年 (昭和61年) ■ホーム・ステイ登録家庭の“お台所交流訪問団”を伴ってニュージーランドへ職員2名を派遣、図書交換先の調査と、写真展素材を収集 (3.15~3.23)

語学講座

LANGUAGE COURSES



協会では大きく分けて4種の語学講座を開いてきました。協会にとって唯一の有料事業ですが、教材に工夫をこらすなどして内容の充実につとめ、国際理解を深める事業のひとつに位置づけてきました。

英語講座は春・秋に各6ヵ月間開講し、週1回の授業はアメリカ人専任講師による自由会話と、ランゲージ・ラボラトリを使った授業の2部立てとしてきました。単なる英会話の練習に終るのを避けるため、神奈川人として知ってほしい地域文化、社会事情などを盛り込んだ自主教材を作成したほか、1983年(昭和58年)からは講師を神奈川の姉妹提携州であるアメリカ・メリーランド州から招聘し、姉妹都市交流の一翼も担いました。

日本語講座は神奈川とその周辺に住む外国人を対象に、英語講座同様、春・秋各6ヵ月のコースを設けてきました。入門から上級まで4レベルのクラスがあり、神奈川県内には数少ない日本語教育施設のひとつに数えられています。また、この上級クラス修了以上の力を持つ外国人に対して、1983年(昭和58年)から無料講座「日本語セミナー・新聞を読んでもみませんか」を開講してきました。これは春・秋各4日づつの短期セミナーですが、教室で習う日本語と新聞や雑誌に現われる言葉とのギャップを埋めるものとして参加者の好評を得ました。

これらの講座以外に、協会では神奈川県が毎年招聘する海外技術研修生や地元ロータリークラブ招聘の交換留学生に対して特別日本語講座を設けてきました。これは1~2ヵ月間集中的に日本語を教える不定期の講座ですが、単なる語学の講習にとどまらず、研修生とその相談相手、話し相手になってもらえる協会会員との出会いの場を作るなど、側面からの支援にも配慮してきました。

そのほか、1986年(昭和61年)春にはメリーランドから協会が招いた英語講師フィリップ・トーズさんの発案で、神奈川県内の英語の先生を対象にした「英語ワークショップ」を開催、日米の英語教育についての意見交換をかねた珍しい講座も設けました。



KIA has been offering language courses for both Japanese and foreigners. English classes are designed to help cultivate international perspectives by using original texts.

A Japanese class of four levels is offered on Saturday mornings in hopes of assisting foreigners in their adjustment to life here. Besides the regular classes, a series of free special seminars of "Introduction to Newspaper Japanese" has been available for advanced learners.

Others include intensive Japanese classes for technical trainees and exchange students, and an English workshop for school teachers.

講座数(のべ)

年度	英語講座	日本語講座	日本語セミナー	特別日本語
1977(昭52)	7クラス171名	1クラス 5名	—	1クラス 5名
1978(昭53)	16クラス390名	4クラス 33名	—	2クラス12名
1979(昭54)	18クラス402名	6クラス 61名	—	2クラス13名
1980(昭55)	16クラス368名	8クラス 75名	—	2クラス11名
1981(昭56)	16クラス356名	8クラス 74名	—	2クラス12名
1982(昭57)	16クラス350名	8クラス 92名	—	2クラス13名
1983(昭58)	16クラス361名	9クラス115名	2期36名	3クラス20名
1984(昭59)	16クラス353名	9クラス102名	2期42名	1クラス 8名
1985(昭60)	16クラス355名	9クラス 77名	2期29名	2クラス13名
1986(昭61)	16クラス362名	8クラス 82名	2期43名	3クラス17名

刊行物

PUBLICATIONS



協会では各主催事業の広報と国際交流諸団体の行事を紹介する機関紙ハロー・フレンズを年10回ずつ発行してきました。B5版4～6ページのこのニュースは、会員へ直接郵送するほか、交流団体や図書館などの公共施設、一部の銀行窓口へ送付し、会員以外にも読者を広げてきました。

1982年（昭和55年）には、県内在住外国人のコミュニケーション紙をめざして、英文機関紙Hello Friends International Issueを創刊、以来毎年2回外国人のための生活情報に重点を置いて発行してきました。

1984年（昭和59年）に刊行した通訳・翻訳者リストHelping Handは、通訳や翻訳を通して国際交流に参加したいとする人々をまとめた小冊子です。「プロまでは必要ではないが、手軽に通訳・翻訳を引き受けてもらえる人がほしい」という交流団体や自治体の要望と、神奈川県民の潜在能力とを橋渡しする目的で作成しました。

同じ年に発行した英文のガイドブックEnjoying Kanagawaは、横浜に長く住み、協会の専任英語講師もつとめたロバート・エリクソンさんが編集を担当、協会会員の有志を募って神奈川の各地を直接訪れ、その記録とアドバイスをまとめました。外国から来たばかりの旅行者にも便利のように、地名等にあえて漢字表記を付加したり、手軽に散策できる場所を具体的に数多く紹介したりというキメ細かい編集がこの冊子を手にした外国人の好評を得ました。

1977年（昭和52年）

- 機関紙「Hello Friends」を創刊。発行部数3,000部（8.1）

1979年（昭和54年）

- 「Hello Friends」の発行部数を3,500に増刷（4.15）

1982年（昭和57年）

- 「Hello Friends」の発行部数を5,000に増刷（4.15） ■ 英文機関紙「Hello Friends International Issue」を創刊。発行部数5,000部（9.15）

1984年（昭和59年）

- 国際交流のための通訳・翻訳者リスト「Helping Hand」500部を刊行（3.15）
- 神奈川県内の国際交流団体・サークルリスト「便利帳」300部を刊行（4.15）
- 外国人のためのカナガワ散策の手引き「Enjoying Kanagawa」4,000部を刊行（11.15）

1986年（昭和61年）

- 「Helping Hand」および「便利帳」の改訂作業開始

The Association has issued several publications, including two regular newsletters. KIA activities and other up-to-date events have been announced in a monthly "Hello Friends". A biannual "Hello Friends International Issue" later joined as an additional source of information for foreign readers.

"A Helping Hand - 1st Edition" was published in 1984. This is a list of those who are willing to work for international exchange through interpretation and translation. This booklet has acted as an intermediary between organizations which need the help of foreign language speakers, and motivated citizens with the required expertise.

Another highly regarded publication is "Enjoying Kanagawa", a guide book for walking tours in Kanagawa, compiled by Mr. Robert Erickson, our first Work/Study Grantee, along with volunteer members of KIA. The knowledge of this compact book with detailed maps has been passed down to new residents by word of mouth.



R・エリクソンさん



その他

OTHERS

KIA constantly organizes an eclectic selection of activities to respond to needs from various sectors. The following give an idea of its scope.

HOME-VISITS:

One-day home-visits are a program for busy overseas tourists to catch a glimpse of Japanese family life. In 1984, this program was solely commissioned to the then cosponsors, the Yokohama International Welcome Association and the Kanagawa Prefectural Tourist Association.

PEN-PALS:

More than 600 letters from as many as 20 countries were matched by KIA from 1978 to 1982. Since 1983, we have printed the participants addresses in the newsletters so that readers can write to them directly.

EMIGRATION ASSISTANCE PROGRAMS:

In collaboration with the Japan International Cooperation Agency, we offer counseling service for those interested in emigration. In addition to monthly orientation meetings held on the third Tuesday, the current situation of emigration is presented through exhibitions and lectures on commission of the Kanagawa Prefectural Government.

REFUGEES AID CAMPAIGN:

In 1980, KIA played a key role in a joint fund-raising drive for refugee children in Indo-china. The sizable amount of 23 million yen was forwarded to the Japan Volunteer Center to benefit refugee aid programs in Thailand.

ホーム・ヴィジット

設立時から約5年間行なった「ホーム・ヴィジット」紹介事業は、観光などで神奈川を訪れた外国人に日本家庭を紹介し、何時間か日本の生活を味わってもらおうというものでした。宿泊はせず、また、観光で来県する外国人も対象となる点で「ホーム・ステイ」と異なる性格を持つ事業でしたが、1984年（昭和59年）に協会事業と観光事業を画する意味から、実際の紹介窓口となっていた横浜市観光協会、神奈川県観光協会に事業を移管しました。

ホーム・ヴィジット受入の推移

年度	1978	1979	1980	1981	1982	1983
件数	166件	135件	158件	125件	185件	163件
人数	1,009人	793人	562人	353人	539人	558人

ペンパルの紹介

1978（昭53）年度から1982（昭57）年度まで海外から協会気付で送られて来た個人の手紙を適当な日本人の希望者と結び付けるペンパル紹介事業を行ないました。この間の紹介件数はチェコスロバキア、インド、オーストラリアなど約20カ国、計612件にのびりましたが、なかなか双方の希望に沿う相手を見つけられない場合が多く、1983（昭58）年度からは海外からの文通希望を、時に応じ、機関紙ハロー・フレンズ紙上でまとめて紹介し、日本人希望者には直接先方へ手紙を書いてもらうような形に改めました。

海外移住相談会

協会では国際協力事業団、神奈川県との共催で原則として毎月第3火曜日夜に海外移住相談会を開催してきました。当日は移住啓発映画の上映、説明、個別相談というプログラムで協力事業団の専門係員が相談に応じています。また、移住に関連した展示や講演も神奈川県からの受託事業として毎年数回づつ実施してきました。

インドシナ難民児童救援募金

一連の事業とは別に、1980年（昭和55年）、国連協会神奈川県本部、日赤神奈川県支部と協力してインドシナ難民児童救援募金を行ないました。単発の事業でしたが集まった救援金2,300万円は日本奉仕センター（現在の日本国際ボランティアセンター）を通じてタイでの救援活動に役立てられました。

1986年(昭和61年)3月10日 毎日新聞

和製英語に苦勞します

日本語スピーチ大会「外国人大いに語る」



スピーチ大会で、和製英語の多用が指摘された。スピーチ大会で、和製英語の多用が指摘された。

「和製英語」の多用が、外国人の理解を妨げていると、日本語スピーチ大会で指摘された。

1984年(昭和59年)11月21日 朝日新聞



「ボランティア」の精神は、ボランティアの精神は、ボランティアの精神は...

1981年(昭和56年)12月20日 朝日新聞



55カ国の絵本がずらりと並んだ展覧会

国際交流センターで開かれた「世界の絵本展」の内容が充実し、点字本も用意されている。

1983年(昭和58年)5月20日 朝日新聞

政治漫画家、ラナ・ルリー氏を歓迎

政治漫画家、ラナ・ルリー氏を歓迎して、6月25日午後3時から、横浜市中区山下町、産業貿易センター九階の国際交流センターで講演会が開かれる。



政治漫画家ルリー氏が講演会をする特別企画。ルリー氏の漫画は、ライフ、ニューズウィーク誌をはじめ、世界45カ所の40誌を掲載する新聞、雑誌に転載され、日本では朝日新聞社が専断契約を結んでいる。

1985年(昭和60年)2月17日 Japan Times

Getting Things Done Exciting Possibilities By JEAN PEARCE

By the time you read this, there may be 10 cm of snow on the ground, but now the sun is out, my neighbor's plum trees are blooming and it feels like spring.

1985年(昭和60年)6月11日 神奈川新聞

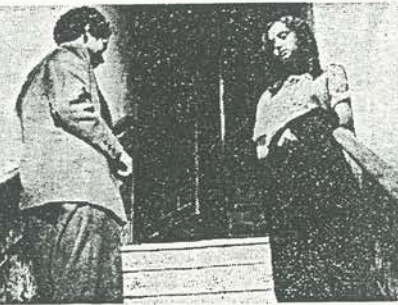
熱気みなぎる画面

県民小ホールで4日間



初的神奈川アメリカ映画祭。初的神奈川アメリカ映画祭は、県民小ホールで4日間開催される。

「初的神奈川アメリカ映画祭」は、県民小ホールで4日間開催される。

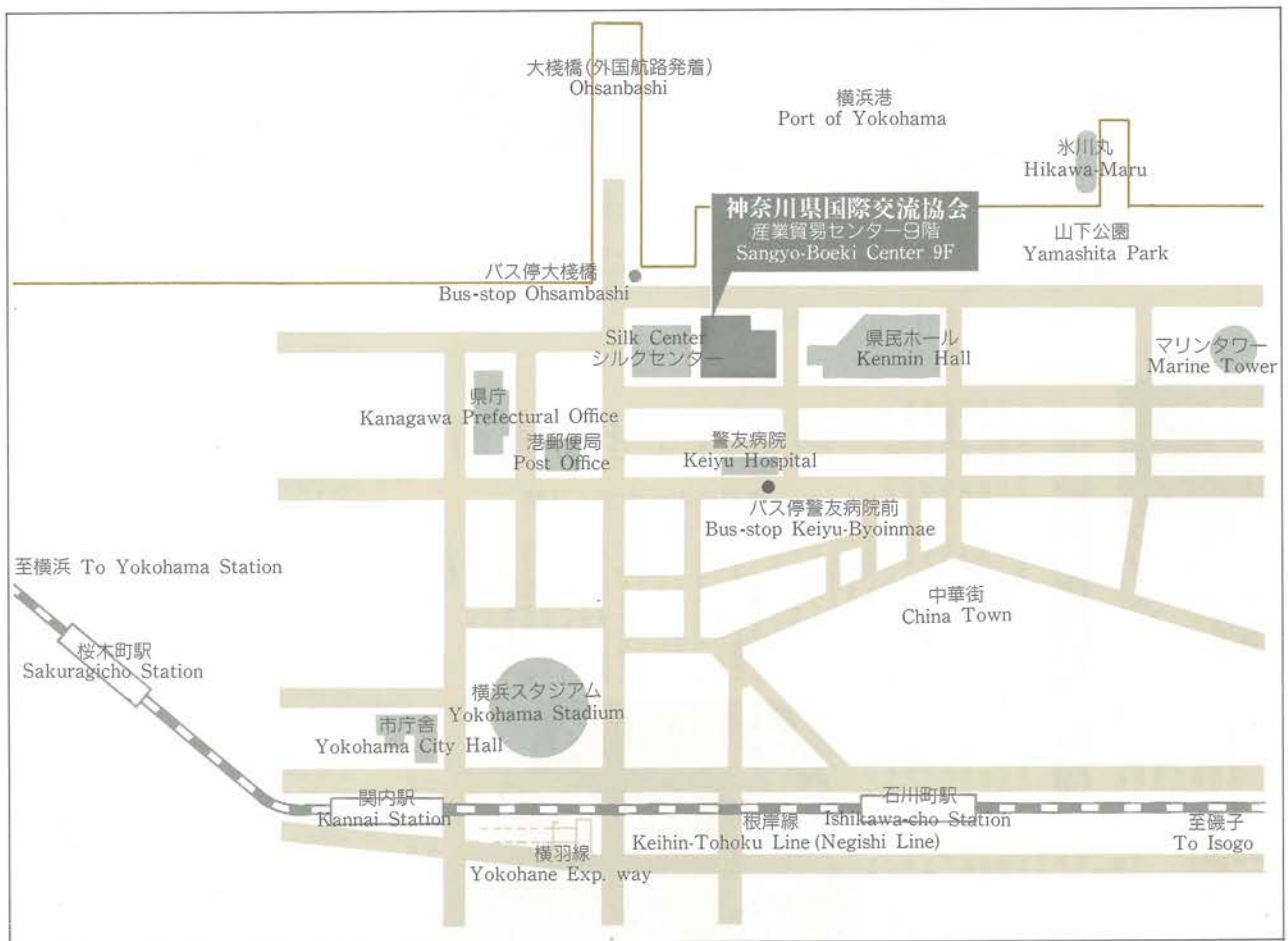


「初的神奈川アメリカ映画祭」は、県民小ホールで4日間開催される。

「初的神奈川アメリカ映画祭」は、県民小ホールで4日間開催される。

(財)神奈川県国際交流協会
横浜市中区山下町2(〒231)
産業貿易センタービル9階
☎045(671)-7070・7075

Kanagawa International Association
Sangyo-Boeki Center Bldg. 9F
2 Yamashita-cho, Naka-ku, Yokohama 231
Phone : 045(671)7070・7075



(財)神奈川県国際交流協会基本財産寄付者 (敬称略)

●民間関係 株秋本食品 味の素株 厚木ナイロン工業株 株上野運輸商会 エバラ食品工業株 株奥村組 花月園観光株 社神奈川県空調衛生工業会 神奈川県信用金庫協会 神奈川県相互銀行協会 社神奈川県電業協会 神奈川県農業協同組合中央会 株神奈川県相互銀行 神奈川県臨海鉄道株 川本工業株 ●株共栄社 株協和銀行 株キョードー横浜 麒麟麦酒株 株群馬銀行 小糸工業株 株埼玉銀行 坂田種苗株 佐藤敬治 ザ・ホテルヨコハマ 山王鍍金株 株三和銀行 株静岡銀行 株清水銀行 株住友銀行 株住友信託銀行株 株駿河銀行 セネラル石油株 ソニー株 株第一勧業銀行 株第四銀行 株太陽神戸銀行 株大和銀行 中央信託銀行株 株東海銀行 東京ガス株 株東京銀行 東京芝浦電気株 ●東京電力株 株東京都民銀行 東洋信託銀行株 東横工業株 奈良建設株 西田興産株 日網石油精製株 日産自動車株 日本アイ・ピー・エム株 日本鋼管株 株日本興業銀行 株日本債権信用銀行 日本周辺機株 日本真空技術株 日本信託銀行株 日本石油株 日本石油精製株 株日本長期信用銀行 ●株富士銀行 扶桑電機株 株北陸銀行 株北海道拓殖銀行 株ホテル・ニューグランド 株ホテルリッチ横浜 ホテルホリテイ・イン横浜 マスダビルディング株 三沢電機株 株三井銀行 三井信託銀行株 株三菱銀行 三菱信託銀行株 三菱石油株 南サークル 安田信託銀行株 株ヤナセ 山岸建設株 山元商事株 株有隣堂 横浜エレベーター株 株横浜銀行 横浜国際交流ボランティアの会 株横浜高島屋 吉田興産株 ロータリークラブ第259地区(50音順) ●県・市町村関係 神奈川県 横浜市 川崎市 ●その他の県内各市・町・村



財団法人 神奈川県国際交流協会
〒231 横浜市中区山下町2 産貿センター9階 ☎045-671-7070
Kanagawa International Association